

## トピックス

### 春画の学際性をめぐって

橋本 順光 × 石上 阿希、矢野 明子

『春画—日本美術の性とたのしみ』(*Shunga: sex and pleasure in Japanese art*)は、大英博物館において2013年10月3日から2014年1月5日にわたり開催されました。春画は奇抜な構図、高い芸術性を認められて、幕府がペリーに贈っています。また一般でも貸本屋で借りたりして楽しまれていました。だが明治に入り検閲対象になってしまいます。ところが皮肉なことに、まさにこの時期に欧米では春画を注目するようになっていきます。影響を受けた芸術家としてロートレック、ピアズリー、サージェント、ピカソなどの名前をあげれば、その影響力の甚大さを知るでしょう。このように春画は文化変容の典型的な例とみなすことができるのです。

すでに本誌は第12号において大部な展覧会図録を書評しましたが、会員の多くからこの研究対象の文化的な意義について、ヴィクトリア朝における文化交渉、または研究者のアプローチについて、もっと詳しく知りたいという声が寄せられました。そこで本展覧会企画、図録作成に大きく参画されました石上阿希(日文研助教)、矢野明子(日文研外来研究員、ロンドン大学)両先生に本誌編集委員である橋本順光先生がインタビューを行いました。発言者各位はその頭文字で表されています。以下は2015年7月30日に国際日本文化研究センターで行われたインタビュー記録です。

橋本 最初の質問ですが、春画はどのような経路で英国へわたっていったのでしょうか。

石上 春画の渡来ですが、17世紀初頭、春画がイングランド国王の使節

の手を経て渡ったのが嚆矢と考えていいのではないのでしょうか。でも、ここではヴィクトリア朝ですから、ヴィクトリア朝の人間がどのように春画を知り、見たのかという問いに限定しましょう。つまり 19 世紀における春画を考えていきましょう。たとえば今回の図録にも掲載したジョージ・ウィットですが、医師で銀行・投資家でもあった裕福な英国人で、日本のみならず世界中のエロティック・アートを蒐集し、スクラップブックを作製していました。そのうちの 3 冊のスクラップブックが日本篇にあてられています。ジョージ・ウィット本人が日本に来たわけではないのですが、知人知友の何人かが来日していて、スケッチを残しました。そして幕末に売られていたそれほど高価ではない春本を買い求めました。英国へ持ち帰ったそうで、春本をスクラップブックに貼り保存したのです。それらが大英博物館の所蔵 (the George Witt Collection) するところとなりました。それは 1865 年のことです。以後、百年間ほどは誰の目にも触れず、外部に出て来ることもありませんでした。

橋本 そういえば世紀末にロンドンで学んでいた南方熊楠も春画を評価していて、アーサー・モリソンや F. V. ディキンズ、大英博物館のチャールズ・ハーキュレス・リードらに春画を贈ったことで、大英博物館には隠されているだけで性的な収蔵品がたくさんあるというようなことを書いています『南方熊楠全集』5, 6 巻『南方熊楠日記』2 巻など)。こんなふう知る人ぞ知る存在であっただけで、一般の人々の目には触れなかったということでしょうか？

矢野 研究等の目的で閲覧することはできましたが、こうしたコレクションを見ることができたのは知識人階級の男性のみに限定されていました。まず労働者階級、女性、そして当然子供はアクセスできませんでした。

橋本 次に春画の受容についてお尋ねします。どのような形で、春画は見られたのか、あるいは使われたのでしょうか。特にヴィクトリア朝にお

いてはどのような形で受容されたのでしょうか。

矢野 ひとつは、図録でリカル・ブルさんも書いておられるように (Richard Bul, 'The Modern West's 'Discovery of Shunga'), 芸術家、たとえばビアズリーなどのインスピレーション源になったことを指摘しておきましょう。そして他方、ジョージ・ウィットのように、エロティック・アート以上に世界の性文化、つまり異文化のなかの性文化という人類学的視点から、エロティック・アートを集め、日本の春画がその対象になったということです。つまり、芸術的視点と人類学的視点というふたつの視座があったことは、私たちが展覧会で発表した通りです。

橋本 なるほど、南方熊楠の指摘と重なりますね。今回の春画展が、ロイヤルアカデミーやテートといった美術館ではなく、大英博物館で行われたことは象徴的に思います。いわゆるファイン・アートとして持ち上げはしないものの、芸術か猥褻かという不毛な議論は最初から避けているのが新鮮でした。では春画は、英国にどんな影響を及ぼしたのでしょうか？ 逆に春画自体も、海外での販売やヨーロッパの図像に影響を受けたりしたのでしょうか。

矢野 先ほど例にあがりました、ビアズリーの場合には、「女の平和」連作において、身体の半身くらいある巨大な陽物をモチーフとして描きました。日本中世以来、脈々と受け継がれてきた表現が別の文脈で再生して、古代ギリシアと結びつけられたことを、私は大変興味深く思います。

橋本 ヴィクトリア朝では日本がしばしば古代ギリシアになぞらえられていて、エドワード・カーペンターなどは同性愛におおらかなところにも注目していたのですが (*Intermediate Types among Primitive Folk*, 1914)、そんな関心が春画にもみられるのかもしれませんが。買い手というか、英国の影響としてお伺いしたかったのは、河鍋暁斎が春画を描いて逮捕されたといわれていますよね。山口静一氏が指摘『暁斎逮捕の原因と

なった春画『暁斎』(90号・2005年)されていますが、その春画というのは、文明開化した貴顕の人々のあられもない姿を描いていて、どうやら頼まれて描いた可能性があるらしく、1993年の大英博物館での暁斎展で展示されました。王や貴族の風刺を兼ねるといふか、それを隠れ蓑にするのは西欧のポルノグラフィの基本なのですが、そんな既存の秩序をくつがえすような形での春画は、ヨーロッパの市場で人気があったような気がします。つまり、そんな需要に答えて春画は作られたのでしょうか。欧米での人気によって、陶磁器などでは粗悪品が乱造されましたが、そんな観光客向けのお土産のようなことが、春画にもあったのでしょうか？

矢野 明治期の外国人向けという意味ではむしろ写真がその役割を果たしたかもしれません。写真の中で、湯浴をした後の浴衣をはだけたような女性の姿を撮影するなど浮世絵的な構図を写真家たちが受け継ぎ、お土産用の一環としても売られたようです。

橋本 横浜写真などがまさにそうですね。ヨーロッパの裸婦のポーズに着物を着せたようなものがなかにはあります。春画にもそのような例があるのでしょうか？



石上 春画は幕末から先細りになっていき、暁斎があのような最後の絵師となったのではないのでしょうか。同時に法的規制が強化され、かつての勢いは失速したと言わざるを得ません。名もなき絵師が書いたものを応挙や北斎が描いたものとして大量に作り、それを西洋人に売っていたようです。絵の質はいわずもがなでしょう。

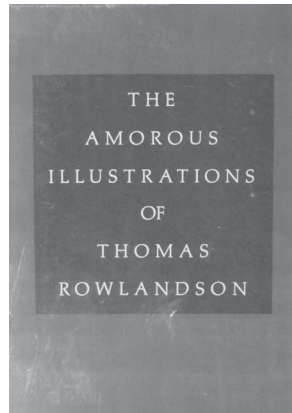
矢野 江戸時代に浮世絵師は春画をその他の制作も含めた画業の一環とし

て描きましたが、幕末には春画を専門とする絵師が登場しました。近代に入ると売れない画学生が春画を描くということもあったようです。

橋本 売れないために、ポルノグラフィーを書く作家と同じですね。その幕末に春画専門の絵師とはどのような人ですか。

矢野 恋川笑山という人が知られています。

橋本 そこでお伺いしたいのですが、英国にトマス・ローランドソンという諷刺画家がいて、貴族や王族の性的な逸脱をよく描きました。このような英国のエロティックな文化と春画は交錯したり、融和したりしたところはあったのでしょうか？ 関連して、今回の春画展では弱者への暴力的な描写を避けようとしたとのことですが、そもそも春画にはあまり見られなかったとおっしゃっていますよね。こんなふうに女性の描き方というか、日英のジェンダー的差異は認められるのでしょうか？



矢野 私はヴィクトリア朝時代の春画の受容と流通についてはブルさんの論じておられること以上には知り得ませんので、彼の論を踏襲することになります。ヨーロッパでは異文化における性表現として、そして造形そのものとして驚くべきものがあると見られたのでしょう。

橋本 ではジェンダー差はいかがでしょうか。熊楠によればモリソンも持っていたという春信の春画がいい例ですが、男女がともに似たような着物や扇などを使っているため、英国で日本はしばしば女性らしい国と誤解されましたが、男性・性と女性・性が異なった形で理解されたことはなかったのでしょうか。

矢野 英国で近世以来、性のもろもろを教えてくれる『アリストテレスの性読本』があったように、江戸時代の日本にも一般的なレベルでの性に関する項目の入った教訓書がありました。しかし他方、春画においては「亭主の顔など見たくもない」と情夫に訴える女というようなきわどい表現があります。展覧会のなかでは、そういった言説を庶民のカウンター・カルチャーとしてとらえていました。春画に表わされた男女のあり方と、しかるべき男女のあり方が、拮抗していたのではないかと思います。

橋本 今回、春画に付された「詞書き」を翻訳したのはやはり画期的でしたよね。北斎の有名な蛸と海女の春画が、背景に書き込まれた文章を翻訳してみると、これまで欧米でみなされてきたほど暴力的な場面ではなかったことが明らかになったわけ



です。矢野先生が出演された春画展の開催を知らせる BBC ラジオを私はたまたま聞いたのですが、そんな背景の文章が翻訳されたおかげで会場では笑い声が絶えなかったとのことでした。こういった翻訳の困難さについてはいかがでしょうか。

矢野 そうですね、書き入れの翻訳については、私たちは日英のチームでやっていたので、英国の共同研究者からこれはどういう意味なのという質問があれば、それに対して言葉の意味やニュアンスを含めて解説し、どう翻訳するのがよいかを相互に重ねて検討しました。そうした作業を繰り返して行いました。

橋本 少し斜に構えた言い方になりますが、日本人女性の研究者が参加協力したということは、今回の春画展の英国での成功を大きく後押ししたと思います。そこでなんですが、どうしてこのような春画を研究対象と

なされたのでしょうか、まあ「このような」というのは、失礼な話で(笑)。石上先生はご著書の『日本の春画・艶本研究』(2015)の「あとがき」で何度も繰り返し聞かれたと述べられていて、その経緯をすでに詳しく書かれていますし、何度も質問されて閉口でしょうが…。

石上 本当に何度もよく質問されます。大学院修士課程のとき、何を研究しているかをおねえで自己紹介すると、笑いが起こることがしばしばありました。ところが、この十数年間で、春画研究に対して失笑をさそうような傾向も変わって来ました。私自身こうした状況の激変ぶりに驚いています。この十年間、春画コレクションが公開され、春画研究が国際プロジェクト化されるようになるような研究上の変遷を経ました。まさにそうした推移は自分でも予期できないことでした。研究環境の激変ぶりには驚いています。

橋本 たしかに春画展を日本でも行うことが決定する前に、三菱一号館美術館での河鍋暁斎展では、春画がさして騒がれることもなく普通に展示されていました。春画の展示やそれに対する英国の反応については、論集『文化資源学』13号に寄稿された先生方のご論考(特集「春画と日本社会」)に詳しいですが、今後は、もっと普通に春画が展示されるようになればいいですね。矢野先生はいかがでしょう。

矢野 私の場合、日本美術史を専攻していたので、伝統的な美術史の中で春画はいっさい登場しませんでした。春画を見ることもなかったし、関連図書のなかに図版掲載されていたこともありません。そういった教育を受けてきた私が春画を研究するプロジェクトがあると聞いて、「それは何だ!？」と驚いた次第です。そうしたなかで見たことも、聞いたこともなかった肉筆春画の存在を知り、そして物語絵巻のなかで春画が同時代的に共存していることを知りました。このような事実を教えられたこともなかったですし、また自分も知りませんでした。物語絵巻の範疇で言えば、春画はいわば絵巻の裏ヴァージョンだと思われます。表と裏にはどこからか分からない境界があり、しかし春画の絵巻単体では成立

しなかったのではないか。表があるから裏があるので、補完し合いながら不可分な形になっているのは、当時の美意識を、性に関する考え方を、知るにあたって欠かせないのではないのでしょうか。だから今後の作業としては、抜けおちている資料を着実に組み込んでいかなければならないと考えています。

橋本 なるほど。しかし、今回、こんなに大部な英語の図録を出版するのは大変だったのではないのでしょうか。

矢野 むずかしかったのは、春画の特に本（春本）のタイトルをどのように英語に訳すかという問題がありました。英国人研究者が共同研究してくれたおかげで、日本人研究者である私たち自身が看過していた意味を、改めて漢字直すという基本的な姿勢を得ました。英国人研究者から日本語をもの徹底的に問いかけされたことが、本当にいい勉強になりました。



石上 それから春画に関する参考文献作成についても苦勞しました。書誌は日本だけではなく欧米までの広範囲に及ぶため、どこからどこまでを参考にすべきか、どこまでを春画研究の領域にすべきか大いに迷いました。だが、そうした書誌作成が春画研究の重要性を逆照射したとも言え添えておきましょう。

矢野 さらに春画としてどこまで作品を春画に入れたらいいのかといった問題を考えているうちに、論点も増殖していき、それに応じて論文も多くなっていき、このような大部な図録が出来あがってしまったのです。

橋本 それだけに画期的で影響力のある研究書になったのだと思います。



あの展覧会以後 ‘shunga’(春画)は英語になったのではないのでしょうか。ドイツでもフランスでも、「マンガ」のように国際語になったような気がします。最後に手短で結構ですので、学際的な共同研究の利点についてお聞かせいただければ幸いです。

矢野 日本で研究するときには日本ならではの方法論がありますが、海外にいと日本にいては見えないものが見えてくる場合があります。また、英語と日本語では言語の論理が違うために書いていくうちに論点が少し変化していきます。そういう意味で新しい視点を得ることができるのです。日本語ではなく英語で書くことによって、このようなことをこのように説明しなくてはいけないのだ、と新たな理解を求められます。研究を進めていくうちに、そうした言語の差異、論点のずれが生じ、逆に新しい知見をもたらしてくれるのです。

石上 「春画とは何ぞや？」という問いに応えるために、春画を研究していくには、何十人もの研究者が必要となります。今回のプロジェクトの一員になり、そうしたことがよく分りました。文学・美術・風俗研究のみならずジャポニスム研究なども総動員して、あらゆる切り口で切り込まないと春画の世界は解明できません。そういう意味で今回の春画研究に動員された陣容は理想的であったように思います。個人では絶対にやれるものではありませんから。

矢野 強いてうらみ言をいえば、宗教研究をされている方に参加を促せばよかったですね。人脈の関係上、どうしても文学、美術研究の関係者が多くなってしまいました。

橋本 今日はわたしたちの『ヴィクトリア朝文化研究』誌のために貴重な時間を割いていただき、どうもありがとうございました。

(文字起こし・構成 中島俊郎)